



壊れゆく者たち



第1夜

赤鈴

OLの昼食

「智子、ランチ行こうよ」

「うん、ちょっと待って」

ある日の昼下がり、智子と恵子は持参の弁当を片手に近くの公園へと向かった。

公園に到着するとベンチに腰かけ、昼食をとる。

空は青く澄みきり、太陽はがむしゃらに光を地上へと降り注いでいた。

季節は春、公園は桜で辺り一面ピンク色に染め上がっていた。

「桜、綺麗だね」

「うん、女二人で見るにはもったいないね」

「たしかに」

恵子は思わず苦笑いを浮かべる。

「でも、智子には"雅也くん"っていう立派な彼氏がいるじゃん」

「まあね」

「美男美女カップルだもんね」

「そんなことはないよ」

「そんなことあるよ。彼氏は企画営業部のエースでイケメン、彼女は美人OL。絵に描いたようなカップルじゃん」

「恵子にだって人事部の宮本くんっていう優しい彼氏がいるじゃない」

「あんなのダメダメ。ナヨナヨしてるし、気も小さいし、"女の腐ったような奴"ってきっとああいふ奴のことをいうんだよ」

「そんな風に言ったら宮本くんが可哀想だよ」

「いいのよ、あんな奴」

昼食を食べながら、恵子との他愛もない会話に花が咲く。時間は瞬く間に過ぎていった一

「そろそろ戻ろうか」

「そうだね」

昼食を食べ終わった2人は会社へ戻ることに。

その時、ふと智子は誰かの視線を背中に感じた。振り返り、辺りを見渡す。

「どうした？」

「ううん、なんでもない。行こ」

智子は怪訝に思いながらも、その場を後にした。

会社へ戻る途中、智子の携帯からメールの着信音が鳴った。

メールは雅也からだった。

「雅也からだ。なんだろ」

携帯を手に取り、メールを確認する。

（今夜、大事な話がある）

思わず胸が高鳴る――自分の心臓の音が聞こえる。

「智子？」

「な、なんでもない。早く戻ろ」

智子は足早に会社へと戻っていった。

その日の夜、仕事も終わり、智子は雅也を会社の前で待っていた。そこに、雅也が駆け寄ってくる。

「ごめん、待った？」

「全然。私も少し前に仕事終わったところ」

「そっか、じゃあ行こうか。何か食べたい物とかある？」

「別になんでもいいよ。雅也に任せる」

「じゃあ、俺の行きつけの店があるんだけど、そこでいい？」

「うん」

2人は手を繋ぎ、夜の街へとゆっくり歩いていく。生暖かい風が二人の間を通り抜ける――

「もうすっかり春だね」

「うん、昼間公園に行ったけど、桜満開だったよ」

「じゃあ、今度2人で花見にでも行こうか」

「うん、私お弁当作るね」

「智子の作る料理は最高だからな、つい食べ過ぎてしまうよ」

「食べきれないくらい作ってあげる」

「おいおい、勘弁してくれよ」

2人の楽しそうな笑い声が夜の街にこだまする。街の灯りが2人の周りを明るく照らし出す。

無人島レストラン

しばらく歩いていると、暗い路地を曲がった先に1軒の店の看板が見えてくる。近づくと、看板には"ステーキハウス 無人島"と書かれている。小さな店で、お世辞にも綺麗とは言い難い店だ。

智子は不安そうな顔で雅也を見つめる。

「大丈夫だよ。テレビの"グルメ特集！噂の名店"でも紹介されたほどの店なんだぜ。特に、ここのステーキが抜群に美味しいんだよ。1度食べたら忘れられない味っていうかさ」

「そうなんだ、雅也がそこまで言うんだから、よっぽど美味しいんだね。楽しみ」

中へ入ると、狭い店内にカウンターと鉄板があり、その前に椅子が5つほど並べられている。

どうやら目の前で肉を焼いてくれるスタイルのようだ。

お客は雅也と、智子以外誰も来ていないようだった。

「いらっしゃい」

奥からシェフが出てきた。頬は少し痩せこけ、目の下に大きな隈ができている。声にも生気が無く、少し不気味だ。

「2名様ですか？」

「はい、焼き方はお任せします」

「かしこまりました」

そう言い残すと、シェフは静かに厨房の奥へと消えていった。

「あのシェフ、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、少し変わってるけど腕はたしかだから。たしか、"山本さん"っていったかな」

「山本さん？なんで名前まで知ってるの？」

「前に少し話したことがあるんだよ。過去に色々あったらしいよ」

「そうなんだ」

しばらくして、奥からシェフが肉の塊を運んできた。それを2人の目の前でステーキ2枚分切り分け、鉄板で焼いていく。

上から塩コショウを振りかけ、肉の焼ける心地いい音が店内に響く。

「そういえば、大事な話ってなに？」

「さすがにここではちょっと。後で場所を変えてから話すよ」

胸が再び高鳴るのが、智子には分かった。自分では抑えきれないほどに――

「場所なんてどうでもいい。私は今ここで聞きたいの」

「――分かった。智子がそこまで言うんなら、ここで話すよ」

雅也は深い溜め息をついた後、背広のポケットの中から小さな四角いケースを取り出した。その手は小刻みに震えている。

「俺達付き合って3年だろ？だから――」

雅也はゆっくりとケースを開ける。中では2カラットほどのダイヤモンドが埋め込まれた指輪が美しく輝いている。

「お、俺と結婚してくれ」

雅也の声が店内中に響き渡る。シェフは動じることなく、肉を焼き続けている。

店内にしばしの沈黙が流れた。肉が焼ける音だけが店内に響いている。

智子は石像のように固まって動かない。

「も、もちろん返事はすぐにはいわない。だから――」

「――い」

「えっ？」

「はい。不束者ですが、よろしくお願いします」

「――マジで？」

「マジで」

「あ、ありがとう智子」

「ううん、私の方こそありがとう。幸せになろうね」

「ああ、幸せにするよ」

2人は椅子から立ち上がり、熱い抱擁を交わした。そして、2人の唇が重なり合おうとした時――

「お待たせしました」

どうやら肉が焼けたようだ。2人は顔を見合わせ、思わず顔を赤くする。

「と、とりあえず食べようか」

「そ、そうだね」

2人は黙々とステーキを食べた。シェフの視線を感じながら――

「ああ、美味しかった。本当に食べたら忘れられない味だね。クセになっちゃいそう」

「だろ？なァシェフ、この肉どこで仕入れてるんだ？」

「それ私も気になる。どこの、何の肉なんですか？」

シェフの顔が急に険しくなる。

「企業秘密です」

それだけ言うと、シェフは何も語ろうとはしなかった。

「気になるけど、仕方がないな」

「そうだね、でも本当に美味しかった」

「喜んでもらえて、俺も嬉しいよ。じゃあ、そろそろ行こうか」

「うん」

「シェフ、お勘定お願いします」

「お代は結構です」

「えっ？でも——」

「私からお二人への気持ちです。幸せになってください」

「ありがとうございます。今度は俺たちの子供と一緒に来ます」

「ごちそうさまでした」

そう言うと、2人は店を後にした。

その背中をシェフはいつまでも見つめ続けた。

「お幸せに」

シェフは何かを予感するかのように、不気味に微笑んだ。

遠ざかる2人の背中を見つめながら——

運命の第2夜へ続く